

「ここ、ずっと泣いてたんですね」——隠れ家エステ  
の施術師に、身体ごと  
溺愛されています

指が、沈んだ。

肩甲骨の内側、自分では絶対に届かない場所に、大きな手の親指がずぶりとめり込む。

「……っ」

施術台に伏せた身体が、自分の意思とは無関係に震えた。

初対面の男の手だ。名前すら覚えていない。なのにその指一本が肩の奥に入ってきただけで、背骨に沿って甘い痺れが走り落ちて、腰の奥が——疼いた。

「力、入ってます」

低い声がすぐ上から降ってくる。

余分を削ぎ落としたような、必要な音だけの声。

「……すみません」

「——ここに全部溜めてるでしょう。言えない言葉を」

親指がもう一段、深く沈む。痛いんじゃない。圧がゆっくりと浸透してきて、ガチガチに固まった筋肉の奥で、ぷつん、と何かがほどける。

「んっ……」

喉の奥から変な音が漏れた。

甘い。自分でも分かるくらい色を含んだ吐息で、施術中に出していい声じゃない。

——嘘でしょ。初回なのに。

白石滯、三十歳。IT系メーカーのプロダクトマネージャー。会議では誰よりも冷静に話すくせに、看板も出ていない雑居ビル四階

の施術室で、知らない男の指一本に喉を鳴らしている。

情けない。情けないのに、身体がもう一度あの圧を欲しがっている。

「頑張りすぎです」

指が離れない。肩甲骨の内縁をじわりと押し広げながら、声だけが降ってくる。

「——身体がそう言ってます」

鼻の奥がつんとした。

泣きそうになる。施術台の上で。初対面の男の手で。馬鹿みたいだ。

でも——この指は、三年分の「大丈夫」を嘘だと暴いた。

＊

先輩の相良さんからDMが来たのは三日前のことだ。

『前に話してた肩の件。ここ行ってみて。私はここで人生変わった』

住所と「紹介者：相良」の一行だけ。看板なし。HPなし。口コミ以外の情報ゼロ。怪しい。怪しいけど、もう限界だった。右腕が肩から先、自分の身体じゃないみたいに重い。マグカップすら落とした。整形外科は「異常なし」。鎮痛剤。接骨院三軒。マッサージチェーン店は数え切れない。どこに行っても「すごい凝ってますね」と揉まれて、翌朝には揉み返しで余計に痛い。

——金曜、二十一時。

エレベーターを降りると、薄暗い廊下の奥に「鳴」とだけ彫られた木の表札。

ドアを開けた瞬間、男が立っていた。

白のカットソーに黒のパンツ。腕を組んでいて、前腕が太い。身長は百八十はある。肩幅が広く、背中が分厚い。爪だけが妙に短く整えられていた。顔は——整っている。でも迎える笑顔がない。細い目が私を捉えた瞬間、身体の内まで見透かされるような感覚がして、心臓が鳴った。

「白石さん。相良さんからの紹介ですね」

緒方律、三十五歳。それだけ名乗って、カウンセリングシートを差し出した。

「気になる箇所」の欄に「肩・首」と書く。律はそれを三秒だけ見て、テーブルに伏せた。

「着替えたら呼んでください」

施術室で一人になる。バスタオルを胸に巻いて、紙ショーツに履き替えて、うつ伏せになる。シートが麻で、少しだけざらつく。

——男性に身体を触られるのは何年ぶりだろう。

三年前に別れた恋人のことを思い出しかけて、すぐに蓋をした。あの人の前でさえ鎧が脱げなかった。寝ているときすら肩の力が抜けない自分が嫌で、自分から終わらせた。

それ以来、誰にも身体を触らせていない。

足音。施術台の横に立つ気配。

両手が、肩甲骨の上に乗った。左右同時。圧はゼロ。乗せただけ。

なのに――身体が、震えた。

律は三十秒ほど、何も言わず手を動かさなかった。掌の温度だけが、じわりと肩に沁み込んでくる。大きな手。私の肩甲骨を左右からすっぽり包んでしまう手。

「肩じゃないですね」

「え？」

「肩だけじゃない。――全部です」

手がゆっくりと動き始めた。肩から首筋。首筋から頭蓋骨の付け根。後頭部の際を指が辿る。

「首。背中。腰。脚。――全身が防御してます。触られること自体に緊張してる」

心臓が跳ねた。

カウンセリングシートの「肩・首」を、この人は信じなかった。手で、直接、読んだ。

そこからの施術は、今までのどこの店とも違った。

揉まない。

力ずくで押さない。

痛みの手前で角度を変えて、筋肉の抵抗を迂回して、奥に届く。深いのに、痛くない。身体が驚いて縮こまる暇を与えないまま、硬い層を一枚ずつ剥がしていく。

太腿の裏に手が移ったとき、脚がぴくりと跳ねた。

律は何も言わなかった。圧を微調整して、何事もなかったように続ける。

——その「何も言わない」ことに、胸が詰まった。

施術が終わって起き上がると、肩の位置が違う。下がっている。  
首が回る。呼吸が深い。

律がぬるま湯を差し出した。陶器の湯飲み。手に収まる温度。

「週一で来てください。一回じゃ戻します」

「……戻す？」

「あなたの身体は、緊張のほうが楽だと覚えてしまってる。書き換えるには時間がかかります」

素っ気ない口調。でも「時間がかかります」のひと言に、投げ出さない意志が透けていた。

帰り道、身体は軽い。でもそれ以上に、肩甲骨の奥に律の指の残像が棲みついていた。あの場所に沈んだ指だけが、私の「大丈夫」を壊した。

まだ、熱い。

\*

翌週。月曜から木曜まで、仕事は平常運転だった。

でも——水曜あたりから、肩甲骨の奥が疼く。凝りとは違う。律の指が触れた場所が、まだ覚えている。もう一度あの圧が欲しいと、身体が訴えてくる。

施術を受けたいだけ。プロの施術を。

そう自分に言い聞かせて、金曜の夜、サロンのドアを叩いた。

律が開ける。無表情。「どうぞ」だけ。

うつ伏せ。律の手が肩に触れた瞬間——前回より明らかに早く、身体が緩んだ。

律の手を「知っている」身体。安全だと判定した身体が、力を手放していく。

「少し戻ってますけど——前回よりいい」

事実確認以外の色がない声。でも「いい」の一語に、胸が小さく跳ねた。

二回目は、前回より深い層だった。脊柱の際を一つずつ解放していく手。胸椎の中程で背中がふっと落ちる感覚がして、胸が開く。横隔膜が動く。

「は……っ」

深い呼吸。固まっていた場所がほどけるたびに、感覚が鋭くなっていく。シーツの繊維。オイルの温度変化。律の指先の、関節の硬さ。全部が、肌に押し寄せてくる。

仰向けに変わる。

律の指が鎖骨の下を辿った。鎖骨から胸の上縁に近い場所へ。フェイスタオルの縁ぎりぎり。

「っ……」

息が浅くなる。律の指がタオルの境界線の一センチ上をなぞっている。施術として正しい場所だ。大胸筋と鎖骨を繋ぐ筋膜のリリース。分かっている。——でも私の意識はタオルの向こう側に引きずられていた。

あと少し下に来たら。

あの指がタオルの下に触れたら。

「息を吐いて」

律の声に従って吐く。吐いた瞬間、指がずっと深く入った。鎖骨の裏に滑り込んで、縮んでいた筋膜を引き伸ばす。

「ん……っ」

——甘い声。

施術中に出していい声じゃない。分かっている。なのに止められない。律の指が鎖骨の裏で丁寧に戻るたびに、乳首の先端がツン、と硬くなっていくのが分かる。タオルの下で浮き上がっているのを悟られたくなくて、手を胸の上に置いた。

律の手が、一瞬だけ止まった。

その微かな間を、私の肌は受け取ってしまった。

気づかれた——？

でも律はすぐに施術を再開する。何事もなかったように。ただ、手が——さっきより少しだけゆっくりになった。それを身体が感知している。丁寧になったのか、躊躇しているのか、分からない。でも私の肌は、律の掌が一ミリ動くごとに反応して、鎖骨から胸の上縁まで、じわじわと熱を広げていく。

帰り道。

鎖骨の下が、まだ熱い。

お風呂に入って、自分で同じ場所を触ってみた。何も感じない。律の手じゃないと、身体が反応しない。

施術を受けたいだけ。それだけ。



嘘だ。自分でも分かっている。

＊

三回目。金曜、二十一時。

「今日から腰と骨盤もやります」

律の予告にうなずく。タオルの掛け方が変わった。腰から骨盤にかけての布が小さくなって、腸骨の稜線が露出する。

うつ伏せ。律の手が腰に触れる。

肩や背中とは違う。腰は身体の中心に近い。手が来るたびに、下腹にじわりと熱が落ちていく。

仙骨。律の掌が仙骨に乗った。

「……っ」

身体が跳ねる。仙骨を温められると、骨盤の中で何かが共鳴するように全身の力が溶けていく。

それと同時に――骨盤の底が、ぴくん、と痙攣した。

下腹の奥。紙ショーツの内側に――。

熱い。

(嘘でしょ……施術中に……っ)

濡れている。明らかに。

律の手は仙骨から臀部へ移った。深い筋肉をほぐす肘が臀筋の奥に入っていく。硬い層がほどけるたびに、骨盤の中に空間ができて

、そこに封じていた感覚が流れ込んでくる。

「ん……っ、あ……」

声が止められない。太腿の間に力が入る。

「——力、入ってます」

律の声は平坦だ。いつもの指摘。

でも——律は「どこに」力が入っているか分かっている。太腿。内腿。それが何を意味するのか、十二年の施術師が読み違えるはずがない。

律は何も言わなかった。何も言わずに施術を続けた。

その沈黙が、指摘されるよりずっと深く私を追い詰めた。全部分かっていて、黙っている。——その配慮が、余計に身体を疼かせる。

仰向け。腹部の施術。

律の手が肋骨の下縁からゆっくり下りてくる。下腹へ。恥骨に近い、深い位置。

紙ショーツの上端のきわに律の指が来たとき——。

私の腰が、浮いた。

律の手に向かって。自分の意思とは無関係に。

頭が真っ白になった。今、私は施術師の手に腰を押しつけた。

律の手が止まった。

沈黙。

「白石さん」

「っ……はい」

「身体は嘘つけないですよ」

心臓が止まりそうになった。

「——ここ、ずっと泣いてたんですね」

律の手が下腹に当てられたまま、言った。

「泣いてた……？」

「骨盤の中。全部固まってる。感覚ごと閉じ込めてる。——いつからですか。身体のこの部分を、なかったことにしたの」

涙がこぼれた。

言い当てられた。自分でも言葉にできなかったことを。

——「もともと感じにくい体質」だと思っていた。セックスで気持ちいいと思ったことがない。元彼にもそう言えなかった。自分には女としての感覚が欠けているのだと、諦めていた。

それを、この人の手が「嘘だ」と言った。

感じないんじゃない。感じることを、自分で止めていた。

「次回——ここを重点的にやります。ただし」

律の目がまっすぐ私を見た。

「きつい施術になります。身体の奥が反応します。——覚悟できる

なら、来てください」

涙を拭きながら、頷いた。

「……お願い、します」

\*

四回目。金曜、二十一時。

サロンのドアを開けた瞬間、空気が違った。照明がさらに落ちている。温度が少し高い。オイルの香りにイランイランの甘さが混じっている。

律が立っていた。いつもの無表情。——でも目が少しだけ違う。

「始めます」

うつ伏せ。タオルは最小限。腰から臀部、太腿の上部が露出している。

律の手が腰に触れた。

最初は深い圧で腸骨稜の際をリリースしていく。仕事の手。プロの手。前回までと同じ。——はずなのに、私の身体はもう律の手を「施術」として受け取れなくなっていた。

触れられるだけで下腹が疼く。

仙骨に掌が乗る。じわりと温度が浸透してくる。

「は……っ」

骨盤の奥がゆるんでいく。前回のように跳ねるのではなく、ゆっくり、深く、内側から弛緩していく。律の手がそう導いている。